

「紫式部日記」に関する一考察

知 北 美智子

「紫式部日記」は、紫式部によって書かれたものと見えず間違いなさそうだ。日本古典文学の代表とされ、後世にも多大な影響を及ぼした「源氏物語」を著した紫式部とは、一体どういう人間であって、どういう生活をしていたのだろうか。

時は一条朝であり、紫式部は中宮彰子の女房として出仕している。中宮彰子が敦成親王を御出産あそばすことによつて、その父親である道長とその一家は榮華を極めていく。そんな中で、紫式部は主家の榮華を喜ばしく思いながらも陶酔しきれず、一人物思いにふける時もある。そのため外界を見る目は常に冷静であり、諸行事の様子の描写も驚くほど詳細である。また、いつしかその目は内界の觀察へと移行し、紫式部の精神構造の複雑さとともに構成の複雑さを感じさせる。

「紫式部日記」は、秋山虔氏が「単にいわゆる女房日記ではなく、また随筆などといわれるべきものでもなく、一種独自の内容と構成をもっている」と評しておられるよう

に、一見してその複雑さに気づく。とりわけ、記録的日記的な部分と消息文的隨想的な部分が併存しており、両者が連なっている点に疑問がもたれ、これが「紫式部日記」の不可解さを増す原因のように思われる。ここでは先行文献を参考にしながら「紫式部日記」の内容を捉え、日記的部分と消息的部分との関連を考えていくことによつて、その構成を明らかにしたいと思う。

(1) 冒頭をめぐって

日記的部分と消息文的部分の併存に関する問題と並ぶ構成上の大きな問題として、現存日記の冒頭には欠落があるのでないかということがあげられ、古来盛んに論じられてきた。しかし、この問題については「外証からすれば首欠説が、内証からすれば反対説がそれぞれ有利に思われ」るのであって、資料も出尽くした今、はっきりとした答えを出すことは無理のようである。冒頭部分は、「いよ／＼これから筆を執ろうとする筆者の水の如く澄み切った心境が

読者の胸に迫る」と評されるように序章の性格をもっている。首欠論者もこの点に限っては積極的に否定する術をもたなかったらしく、これが非首欠説を有利にしている。つまり、首欠であるか否かどちらの説に転んだとしても冒頭が序章的な性格を有していることには変わりないと言うことができる。

ではここで冒頭部分を取りあげて、どのような点で序章的と言われるのかを考えてみたい。

秋のけはひ入りたつままに、土御門殿の有様、いはむかたなくをかし。池のわたりの梢ども、遣水のほとりのくさむら、おのがじし色づきわたりつつ、おほかたの空も艶なるにもてはやされて、不断の御読経の声々、あはれまさりけり。やうやう涼しき風のけはひに、例の絶えせぬ水のおとなひ、夜もすがら聞きまがはさる。(141頁)

第一文で、秋の深まりゆく「土御門殿の有様」の情趣深さを「いはむかたなくをかし」と総じて述べ、そして「池のわたりの梢ども」「遣水のほとりのくさむら」「おほかたの空」を取りあげて視覚的に、「不断の御読経の声々」「風のけはひ」「例の絶えせぬ水のおとなひ」をもち出して聴覚的に詳述し直している。紫式部の繊細な感受性によって目には見えないはずの「秋のけはひ」がうまく捉えられている。そして、土御門殿の描写の中にも「をかし」「あはれ」といった情意を表す語が存在することから、この部分は単なる記録ではなく、内部的視点から描かれていることがわかる。土方洋一氏は、「第三文までで描かれるのは、土御門

殿の結構が深まりゆく秋という季節にかき抱かれる時そこに醸し出される微妙な生活感覚である」と述べられる。その「微妙な生活感覚」が現れたとき、第四文へと続く。

御前にも、近うさぶらふ人々、はかなき物語するを聞きしめしつつ、なやましうおはしべかめるを、さりげなくもてかくさせたまへる御有様などの、いとさらなることなれど、憂き世のなぐさめには、かかる御前をこそたづねあるべかりけれど、うつし心をばひきたがへ、たとしへなくよろづ忘らるるも、かつはあやし。(141頁)

視点を「土御門殿の有様」から中宮の「御有様」へと映し、そのお姿やお心ばせのご立派なことは「いとさらなること」と述べている。「土御門殿の有様」から中宮の「御有様」へ、これは観察者であった紫式部の視点が庭前から室内、つまり外から内へ、自然から人物へと移ったことを表す。また、「なやましうおはしべかめる」という表現から、中宮がご懐妊中であること、「不断の御読経の声々」は恐らくは安産祈願のためであったこともわかる。更に視点は中宮の「御有様」から自分自身へと移行している。ここで紫式部は「憂き世のなぐさめには……かつはあやし」と自分の心情を直叙しているが、「うつし心」とはどういう心情であろうか。藤井高尚は「仏の道に思ひ入りたるうつし心」と解している。確かに紫式部は出家入道を望んでいたようだが、ここでは「この世は穢土ぞと思ひしみたる日頃の本心」とみる方が妥当であろう。「うつし心」を「ひきたがへ」、「たとしへなくよろづ忘らるる」心境を「かつはあ

やし」と結んでいる。「かつは」とは一方では、半面では、という意であり中宮の美や魅力を前にすると「うつし心」さえも忘れ去っているという、自分の矛盾した心に気付いたいぶかりを表している。ここで、一般に言われるへ紫式部の精神構造の複雑さに出会った気がした。こは、自分自身の内にある心情を冷静な目でもって客観的に観察しているかのようなのである。言わばもう一人の自分が存在するかなのような叙述がなされていることに気づく。久保朝孝氏が、この叙述は「理性の独語」であると述べておられることから、へもう一人の自分＝理性と考えられよう。ここに、紫式部の内省的傾向を見ることが出来る。

土御門殿の情趣の讚美に始まって、「かつはあやし」という反転する自身の情意に終わる冒頭部分から、紫式部の視点が外から内へ移行すること、外に対しては讚美の色彩の濃い明るい表現がなされ、内に対しては逆に憂愁の情の濃い表現がなされていることに気づく。これは、この日記全体の大きな特質でもあり、冒頭部分には紫式部の日記執筆の態度や方法が集約されていると言えそうだ。また、外界の華麗さ、栄華の中心となる場所（土御門殿）と人物（中宮）を提示していること、作品の起筆としてふさわしい風致が感じられることなどと合わせて考えて、冒頭部分は序章的であると見ることが出来る。

伊藤博氏は、冒頭からその後続く三つの文章（五壇の御修法、道長とのやり取り、頼通の描写）が中宮↓道長↓頼通の順に、深夜↓早朝↓夕暮と描かれている点、その中

にある三つの歌が全て「女郎花」を対象としている点などから「日記始発部の展叙がきわめて構成的な意図に支えられている」ことを指摘された。「扇どもも、をかしきを、そのころは人々持たり」「さわがしうて、そのころはしめやかなることなし」など回想的筆致がいたるところに見られることから、意図的に構成したとも十分考えられる。冒頭以下、頼通の登場までで「敦成親王御誕生」を書き進めていくにあたっての準備がなされていると思われ、冒頭部分の序章的性格もより一層明らかとなる。

(2) 紫式部の心情

○栄華の記録と紫式部の心情

日記的部分は、実際に有職故実の研究資料として利用されてきたことからわかるように、諸行事に関する叙述がほとんどで、かつ詳細である。他の女流日記文字が物語と区別がつかないような内容を含んでいるのに対して、徹底した記録性をもつ「紫式部日記」は異質のもののような印象を与える。しかし、その徹底した記録の中に、紫式部の心情が見え隠れしているのもまた確かなことである。

一条天皇の土御門殿行幸が近くなつた頃、行幸近くなりぬとて、殿のうちを……思ひよそへらる。(164頁)

ここで紫式部は、初めて心の内を露にしている。以前にも増して美しくなっていくお邸を見て「老も退ぞきぬべき心地」を抱いたかと思うと、突然どうしたことか沈んだ気持ちになる。続く長短三つの文章の中に「思ふこと」「思ひか

けたりし心」「思はずに」「思ひがひ」「思ふことなげに」「思ひよそへらる」といった具合に「思ふ」という語が度々用いられている。この点について加納重文氏は「彼女の何かの切迫した感情を示すもの」と述べておられる。その「切迫した感情」とは一体どういうものだろう。萩谷村氏は、その感情の中心は「思ひかけたりし心」にあるとして、

(仮定条件)

思ふことのす
こしもなのめ
なる身ならま
しかば

(当面事態)

めでたきことお
もしろきことを
見聞くにつけて

(仮想結果)

すぎずきしくも
てなしわかやぎて
つねなき世をもす
ぐしてまし

(現実結果)

ものうくおもはず
になげかしきこと
のまさるぞいとく
るしきや

(既定条件)

ただ思ひかけた
りし心のひくか
たのみつよくて

という対応関係を示し、「思ひかけたりし心」とは「出家の志^{五九〇}」であると説明された。が、冒頭の「うつし心」を私は「この世は穢土ぞと思ひしみたる日頃の本心」とみた。このことから紫式部の心は、常日頃憂愁の情に満ちていたわけで、「思ひかけたりし心」もその心情を示したものと理解する。既定条件と現実結果の対応を考えた場合も、「出家の志」が強くて「ものうく……」という状態になるとするよりも、その方が自然であると思う。そして「思ふ」が

多用されていることから、憂愁の情が余程強いものになっていること、そのために出家を考えるようになってきたことが読みとれる。憂愁の情を何とか紛らそうと外に目を移す。「水鳥を……」の歌では、水鳥に自分を投影させ、外見の明と心中の暗との対照を詠じている。紫式部は常に対象のうちに自分を見出そうとしている。冒頭で中宮のご立派さを褒め讃えながらも、自分の平素の心との矛盾を感じたこともそうであった。紫式部の視点が常に外観から内観へと移行しているのが、はっきりと見てとれる。

中宮内裏遷啓の前に里に退出した紫式部はまた物憂い心持ちになる。

すべてはかなきことにふれても……ものほかなきや。

(180頁)

紫式部の憂愁の情は、宮仕えに出てからのものではなかった。それ以前からずっと抱き続けていたものだった。宮仕えに出るまでは話の合う人と物語(源氏物語)を「さまざまにあへしらひ、そぞうごとにつれづれをばなぐさめ」ることができ、「さしあたりて、恥づかし、いみじと思ひしるかたばかりのがれたりし」を宮仕えに出てからは、本当にわが身のつらさを思い知るようになってしまった。気を紛らそうと試しに物語を手にしてみるのだが「見しやうにもおぼえず、あさましく」思われるだけだった。かつて親しくしていた友人達とも出仕後は疎遠になってしまい、紫式部は身の憂さを忘れる方法を失ってしまった。「いとどかか有様、むつかしう思ひはべりしか」

「かかる有様の憂きことを語らひ」とあるように紫式部にとつて「かかる有様」つまり宮仕えは「憂き」ことであつた。こういう意識の下では「古里」は本来ならば氣の休まる所となるはずである。それが「あらぬ世に来る心地」がし、疎外感・孤独感を覚えてしまふのだから、紫式部は自分の居場所までも失つてしまったことになる。かえつて宮仕え先の友人で「まほにもおはする人」と信頼している大納言の君が恋しく思える。しかし、そこで「なほ世にしたがひぬる心か」と自省の念が表れることから、また紫式部は孤独の身となつてしまふ。大納言の君が恋しく思われるのは確かなのだが「身の憂き」や「憂き思ひ」を分かつ相手としてはみていないのだ。紫式部の憂愁の情は、最早物語によつて紛らすことも、親しい友と分かちあうこともできないものになつてしまつていた。宮廷においても実家においても紫式部は孤独であつた。

日記的部分では、盛儀を描写しながらも紫式部の目は常に自分自身を捉えていた。所々に露になる憂愁の情は榮華を引き立たせるためのものではなく、逆に榮華が憂愁の情を引き立てる役割を果たしたと考えられよう。阿部秋生氏は、紫式部が「如何に華やかで美しくても、それは本質的な生活ではないのだと思ひながらその世俗に惹かれてゆく我が心に霜凍るやうな苦しさを味^{あじ}」っていると評されている。紫式部とは、こういう意識をもつた人だつたからこそ、榮華の只中にあつても陶醉してしまわず、冷静な目で盛儀を詳しく描写していくことができたのであろう。中宮彰子

に仕える女房の一人として主家の榮華を喜ばしく思いながらも、その中に溶け込めない自分に気付いてしまつた紫式部は、榮華が極まる程にそれに反比例して疎外感・孤独感を覚え、憂愁の情は更に増すのだった。

○人物論評と紫式部の心情

消息文的部分は、極めて随想的であり、日記的部分と明らかに叙述の内容、方法が異なっている。あたかも誰かに宛てた消息文であるかのような文体で書かれていることが、古来大きな問題として取り上げられ様々に論じられてきた。ここでは紫式部の心情が赤裸々に綴られている。

何人もの女房の容姿を批評した最後に、

心ばせぞかたうははべるかし。それも、とりどりにいとわろきもなし。また、すぐれてをかしう、心おもく、かどゆゑも、よしも、うしろやすさも、みな具することはかたし。さまざま、いづれをかとるべきとおぼゆるぞおほくはべる。(198〜199頁)

とあるのは、紫式部の人間観を端的に表している。容姿の批評のみならず「心ばせ」という内面から滲み出てくる部分にまで批評を加えようとしている。これは、深い人間洞察に基づくものであり、紫式部ならではのものである。ここでもまた、紫式部の視点が外から内へ、表層から深層へと移行しているのがわかる。

人物論評の筆は、当代三才女にも向けられる。和泉式部については、その和歌の才能は認めながらも「和泉はけしからぬかたこそあれ」「恥づかしげの歌詠みやとはおぼえ

はべらず」と評し、清少納言についてなどは「したり顔にいみじうはべりける人」「あだになりぬる人」と批評の手を緩めない。この容赦無き酷評から、紫式部を執念深く、残忍で、無反省な、本能むき出しの、報復のできる根性をもった女性であったとする（註三）清水好子氏のような見解が生じるのも当然のことだろう。しかし、「心ばへ」を大切なものとみる紫式部が果たしてそういう人物であり得たのだろうか。納得できない。ここは秋山氏が「自己の中にある和泉的な、或は清少納言的な生活への苛責ない笞打ちを敢行する精神構造の如実な表現」と述べておられる通りであったと思う。紫式部は、痛烈に他人を批判しながら、自分の中にあるそういう部分を戒めようとした。他人を鏡として自分の姿を見ようとしたのだ。そういうことから良妻賢母型の女性であったと言われる赤染衛門に関しては批評がやわらげられたのだろう。

他人を批評した後、その筆は自身に向けられる。

いはまほしきことも……得たる人は難し。（平略）（208頁）

紫式部は実家の侍女にすら遠慮、気がねをし、多くの人と交わる宮仕えでは「ほけしれたる人」を装っていた。人は様々であって完璧な人などそうはいないのに、たいいてい人は得意な方面のことだけを取りあげて自慢気に振舞う。我こそはと思つて他人を非難してばかりいる。紫式部は、そういう人達をひどく嫌い「ものいふことももの憂」いから知らぬ顔をする。中将の君を「まづわれさかしに、人をなきになし、世をそしるほどに、心のきはのみこそ見えあ

らはるめれ」と批判した言葉をそのまま自分の中にも取り入れ、過ちを起こさないために自己を抑制しようとした。紫式部は、その才能を努めて隠していたと言えらるだろう。才能のある人が、その才能を売りものに振舞うことの方が

むしろ当たり前とさえ見られていた時代に、紫式部は敢えて「おいらけもの」でいることを選んだ。これは宮廷で「そばめ」をたてられないためであり、才能を自認するが故の世俗での彼女の処世術だったと思われる。

様よう、すべて人はおいらかに、すこし心おきてのどかに、おちゐぬるをもととしてこそ、ゆゑよしも、をかく心やすけれ。（210頁）

これが紫式部の目指す方だった。隠健中庸、外面と内面の調和をこそ理想として掲げ、追い求めていたのだ。しかし、それでも悪口を言ってくる人はおり、「すべて世の中ことわざしげく憂きもの」と感じている。

いかに、いまは言忌しはべらじ。人、といふともかくいふとも、ただ阿弥陀仏にたゆみなく、経をならひはべらむ。（213頁）

ここで、前々から抱いていた憂き思いが頂点に達した。今まで誰かと分かち合うこともできずに、一人でかみしめていた憂愁の情だったけれども「すべてつゆばかり心もとまらず」となった瞬間、出家への願いが強くなった。が、結局踏み切ることとはできない。出家遁世をめぐっての紫式部の心は積極的↓消極的↓積極的↓消極的に展開している。紫式部は、宮仕え生活と出家の志という現実と理想の狭間

に身を置き、どちらに飛び込むことも誰かとその心を分かち合うこともできずに一人苦悩していたのだった。

(3) 紫式部日記の構成

消息文的部分は、自己の感懐をじっくり述べた後、かく世の人ごとのうへを思ひ思ひ、はてにとぢめはべれば、身を思ひすてぬ心の、さても深うはべるべきかな。何せむとにかはべらむ。(214頁)

という部分をもつてとじられる。ここが消息文の結びとしての性質を有しているのは明らかである。文体が消息文的(「侍り」の多用、下二段の「給ふ」の使用など)であること、結びの存在などから古来この部分は消息文が竄入したものではないかと言われてきた。しかし、これまで日記的部分と消息文的部分の内容を追ってきて両者を切り離す理由となるものは何もなかったように思える。日記的部分においては、道長一家の栄華を記録しつつも自分は栄華とは相容れない一人浮き立った存在であることを認識し、行事の中にも自分を見出そうとしていた。行事と、そして自分の姿までを客観的に傍観していたのである。消息文的部分においては、他人を論評することによって自分の中にあるそういう部分を戒めようとした。他人の中に自分の姿を見出そうとしていたのである。どちらも一貫して紫式部の視点が外から内へと移行しているのが感じられる。

また、一人孤独に憂愁の情と出家の志の間で迷っていた紫式部に、消息文を贈る相手がいたなどとは考えられな

い。仮に相手がいたとしても、才能をひけらかすことを最も嫌い、他人を非難するのもよくないこと、と努めて「ほけしれたる人」「おいらけもの」を装っていた彼女が、このような手紙を他人に差し出すなどとは考えられない。娘のための宮仕え参考書と見る立場もあるが、それも同じ理由から肯首し難い。「紫式部日記」は、謎のために書かれたものでもなく、ただ紫式部自身のために書かれたものだった。それが消息文の体をもつて書かれたのは、孤独で物語りする相手をもたない、そして自己表出の苦手な紫式部が、その内面を吐露するために選びとった表現方法だったと考えられる。

以上、冒頭のもつ序章的性格、日記的部分と消息文的部分の関連性と消息文的部分の結びの存在、そして一貫していた記録態度からこまでは、消息文の竄入したものなどではなく、一まとまりのものであることが明らかとなる。

が、日記はそこで終わってはいない。この後突然年月不祥の断片的な記述が現れ、寛弘七年の正月の記事が続いている。これらがどういう意味をもつものかは推し測り難いが、年月不祥の記事は、その内容が紫式部の漢才を交えての披露であること、道長との親交を表す挿話であることから「宮仕えの日々の中で『心に籠めがたくて言ひ置き』^(注一四)たかったことども」であったと思われる。寛弘七年の記事は、第二皇子敦良親王御誕生とそれに伴う盛儀の様子が詳述されている。ここは前年の正月、敦成親王の御戴餅の儀の描写の途中で人物論評に筆を移したので、その補充の意

味で付け加えたのだろう。自分自身のために書いた日記に、なぜそのような心配りがされたのかという疑問が生じてくるかもしれない。が、それは念入りに記された冒頭部分と同じで、人の目にふれたときのための心配りと見ることができよう。消息文的文体の使用について、中野幸一氏が「当然危惧される他見予想をおもんばかつての手法であり、非公開性と公開性の接合を求め^五」ものと述べておられることから、紫式部は内奥を語りつつも常に他人の眼を意識していたことがわかる。

これまで、「紫式部日記」におけるその構成について考察を進めてきたが、次のようにまとめることができる。

紫式部は、内的要求から日記を執筆し始めた。回想的筆致がいたるところに見られること、行事の描写が詳細であることから、日次に書き継がれたものではなく、あるいは素材となるものが先行していたかもしれないことが知られる。が、現「紫式部日記」は誰のために書かれたものでもなく、紫式部の内的要求に基づいて紫式部自身のために書かれたものであった。日記的文体と消息的文体と二様の文体が用いられているため、その構成は難解で、消息文の竄入したものではないかと思われていた。しかし、日記的部分と消息的部分の関連は緊密で、切り離して考えることの方が不自然に思え、これは冒頭を序とし、消息文的部分の末尾を結びとして構成された統一した日記であると見る

ことができよう。そして、その後に続く記事は、紫式部が必要性感じて付加したものと考えられる。この付加部分の存在から、日記の構成は意図的なものではなかったろうかという思いが湧いてくる。「紫式部日記」は、意図的に構成された紫式部の宮仕え記録の集大成だったのかもしれない。

注1 日本古典文学大系19「紫式部日記」解説 岩波書

店

2 日本古典文学全集18「紫式部日記」中野幸一

学館

3 紫式部日記の研究 今小路覚瑞 有精堂

4 「日記の眼・日記の時」国文学年次別論文集中古

3・S61

5 紫式部日記注釈 国文学名著刊行会

6 紫式部日記 池田亀鑑 至文堂

7 『紫式部日記』首欠説批判」国文学年次別論文集

中古3・S58

8 源氏物語の原点 明治書院

9 「紫式部の心象」国文学年次別論文集中古3・S

57

10 日本古典評^評全注釈^{全注釈}叢書「紫式部日記全注釈」角川書店

11 評註 紫式部日記全釈 紫乃故郷舎

12 日本文学研究資料叢書 源氏物語Ⅱ 有精堂

13 注12に同じ

14 注8に同じ

15 源氏物語講座第六卷「紫式部日記」有精堂

※ なおテキストには「完訳日本の古典24 紫式部日記」(小学館)を用いた。

